

学 会 報 告

第19回環太平洋地域学会機構国際大会

高橋 義文

7月25日～28日の3日間にかけて、日本地域学会がメインホストとなった The 19th Inter-national Meeting of the Pacific Regional Science Conference Organization (PRSCO) of the RSAI (第19回環太平洋地域学会機構国際大会) が日本大学経済学部にて開催された。国内での国際学会ということもあり、国内の若手研究者の参加や報告例が非常に多かった。学会参加者の内訳は、国内の参加者が約300名、外国からの参加者が約120名(参加国数は約50カ国)であった。

私たちが参加した環太平洋地域学会という名称を聞いたことのある方は何人いるであろうか。そもそも、学会の名称はその研究部門の名称がそのままスライドするケースが多いため、どのような学会であるのかはある程度想像することができる。しかし、環太平洋地域学会という名称だけでは、漠然としすぎているためわからない方がほとんどであろう。そこで、はじめにこの学会がどのような特徴を持った学会であるのかを概説する。

環太平洋地域学会は、オーストラリア・ニュージーランド、カナダ、インドネシア、中国、台湾、日本、韓国、メキシコ、アメリカ(西海岸)といった環太平洋側に位置する国際地域学会員から構成される組織である。今回の国際学会では、三つの全体基調講演と約60のテーマに関する研究報告が行われた。『環太平洋地域』という学会名称とこの度のメインテーマが『持続可能な地域発展のための原則の統合』であったためか、都市近郊、河川流域、バングラディシュ、アジア、南米(チリ、コロンビアなど)、海洋・湖岸などと地域に特

化したセクションが設けられていた。また、それ以外にも、環境評価、環境会計、地球環境問題、環境リスクと情報といった「環境」をテーマに、環境政策と地域経済、地域金融システム、水資源と地域システム、輸送モデル、貿易と空間経済学、労働と雇用、FTAと東アジアの農業問題といった「政策」、「農業問題」、「国際化」などの様々なキーワードでセクション分けされていたのが特徴的である。すなわち、環太平洋地域学会とは、(応用)経済学アプローチを用いて、環太平洋という地域が抱える様々な地域問題を研究する学会であるといえよう。

このような学会に私たちが参加した目的は(学会に参加される方の目的のほとんどはこの二つに尽きると思われるが)、研究成果の発表と他分野の研究者との情報交換である。私たちは、農林業の環境負荷と多面的機能を同時に定量評価することのできる新しい NAMEA (National Accounting Matrix including Environmental Accounts) のフレームワークの構築に関する研究成果を報告した。近年、貨幣単位と物量単位の両側面から環境評価するハイブリッド型の環境勘定が注目を集め始めている背景もあり、国内外問わず有益なコメントを頂けたのが収穫であった。また、同セクション内の研究発表には、現在取り組んでいるプロジェクト研究に関連した稲作農家の環境会計に関する報告例もあり、活発な意見交換を行うことができた。

そして学会最終日の懇親会では、日本の伝統文化である空手の基本組手、自由組手、型の演舞が実演されるという粋な計らいがなされた。しかも、演舞者が糸東流空手の世界選手権優勝者という豪華な顔ぶれであることに驚いた。特に、小柄な女性が緩急の付いた技を繰り出すたびに、開場からは大きな拍手が上がり、懇親会のお酒以上に酔った参加者も多いのではないだろうか。

なお、環太平洋地域学会に関する詳しい情報は下記 URL を参照のこと。

<http://region.hse.tut.ac.jp/>